2014年（平成26年）
第75号
（3月1日）

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
編集委員長：渉外広報　植田恭司
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211
FAX (075)762-2266

三毒（貪・瞋・痴）を払い、福を施そう　～節分会～

２月３日、京都教会において節分会が行われました。今年は午前と夜間の２回に分けて実施されました。午前の部では、午年生まれの最高齢 84 歳から 24 歳までの年男、福娘と厄年の方々をはじめ 450 名ほどの会員が参集し、式典と豆まきが行われました。

式典では、読経供養に続いて、年男・福娘の代表３人の決意発表があり、佐藤教会長のあいさつがありました。その後、貪瞋痴の三毒を分かりやすく説いたコントや、赤鬼・青鬼・黄鬼やおかめが登場して場内を盛り上げました。そして「鬼は外、福は内、福は内、鬼も内」の音頭と共に、年男・福娘が場内の会員に豆をまきます。節分会で頂いた福豆を参拝できなかった家族や信者さんにお分けしようと、歓声を上げながら各々用意してきた袋や風呂敷目いっぱい広げていました。

夜の部は、ちびっこ節分が行われ、子供たちはゲームをして、みんなが一体になったところに、鬼が登場してきました。みんなで力を合わせて鬼退治をしました。「福は内、鬼も内」の掛け声に合わせて、手にした豆をカいっぱいに鬼に向かって投げつけました。その勢いに、鬼は降参。みんなで万歳と大喜びでした。

その後、飛び散った豆を集めようと、やっつけた鬼と一緒に、仲良く豆を拾う子どもたちを見て、佐藤教会長は「未来が明るくなる」と感想を述べました。

引き続き、仕事などで午前の部に参加できない人たちのために夜間節分会が開催されました。

三毒を除く読経供養

笑いを呼ぶコント

豆まきに歓声が響く

ちびっ子豆まき

明るい社会づくり運動　全国集会 in 京都　２日目は延暦寺にて

９月６日(土)、７日(日)に京都が受入れて開催される「明るい社会づくり運動（明社）　全国集会」の概要が確定しました。

一日目の講演会を京都国際会館（写真上）で実施し、基調講演とパネルディスカッションが行われます。その後、会場をグランドプリンスホテル京都に移し、懇親交流会が行われます。

二日目は比叡山に登り、延暦寺を散策後、延暦寺会館（写真下）にて講話を頂きます。

京都国際会館は、明社の提唱者・庭野日敬開祖によって「第１回世界宗教者平和会議」が開催された歴史的な会議場です。

延暦寺の「一隅を照らす」は明社の運動理念と一致するものであり、また、延暦寺と開祖や本会の長年の関係もあり、今回の申し入れを快諾して頂きました。

全国集会の詳細については、次回以降にお知らせします。

時々刻々

先日、向日市・長岡京市で認知症徘徊模擬訓練が行われました。地域住民などが徘徊事故に対する意識を高め、認知高齢者に優しい町づくりをめざそうと実施されました▼毎日新聞に一昨年の徘徊による行方不明者が９，６０７人あったと報道されました。長岡京市で去年の八月に六二歳の男性が行方不明となり、未だに見つかっていません▼厚労省は、昨年の認知症患者数は４６２万人だと発表しました。６５歳以上の１５％といいますから、身近に認知症の方がおられても不思議でない時代になりました▼徘徊訓練後の反省会で、徘徊かどうかの見極め、徘徊の情報を伝えるネットワークづくり、個人情報の公開、などの意見がありました▼その中で、一番大切なことは日頃からの『あいさつ』だという意見が大半を占めました。優しく声をかけることが安心のまちづくり第一歩ですね。

教えをもとに仲間に磨かれ「優しい」人に

京都教会渉外部長　宮地啓安

先日、京都マラソンで宗教者によるタスキリレー「インターフェイス」が行われましたが、今年から会長法話からの学びをお伝えする役目を各部長がリレーすることになりました。今回が２回目となります。

京都市長の門川大作氏が「人間力」という表現をよく使われます。人には素晴らしい力が具わっており、市民の力を結集すれば、困難な問題も解決できるという考えからだと伺っています。

２月 14 日、京都から本部の涅槃会に向かった 48 名が積雪のため山梨県内に足止めされました。帰れたのは５日目の 18 日。バスの中で一泊、現地の公民館と民家に二泊、４日目は甲府教会に宿泊しました。

十分な情報もなく先行き不透明の中、地元の人たちの好意を頂いたことと、参加者が助け合い難局を乗り越えてきました。まさに人間力が試されたのですが、この経験でみんなは一体感が高まったようです。

参加者された方、多くの人の優しさと有難さを体感できた貴重な経験になったと語っておられました。今月の会長法話は、まさに**『優しさ』**がテーマです。

まず、『優しく』という字の意味について教えて頂いています。「優」は人偏（にんべん）に「憂（うれ）」えると書きます。憂えるとは、**心を痛めること、人のかなしみがわかること**。「優」は「すぐれる」と読めるので、人のつらさやかなしみを**敏感に察して自分のことのように思いやる**。この心のはたらきに優れている人が「優しい」人だと教えて頂いています。

釈尊は**「慈悲喜捨（じひきしゃ）」という四つの実践**（喜んでもらう。苦しむ人への思いやり。ともに喜ぶ。とらわれを捨て、平等にいたわる）、**利他心の実践**をすることで、人に優しくなれると説かれました。

法話の後段では、どうすれば「優しく」なれるか、教えて頂いています。「自分に厳しく、人には優しく」といわれるように、**人に優しくすることと心を磨くということは表裏一体**だと述べ、人柄ににじむ誠実さや謙虚さ、大らかさ、相手を思うがゆえの厳しさといった裏打ちが必要だと教えて頂いています。

そして、優しさを育てるために、**「家庭に宗教的な雰囲気があること」**という庭野開祖の教えを紹介し、それが目に見えない偉大なものへの畏敬の念を育て、謙虚さや大らかさを養うと述べておられます。だから、私たちは**法に照らされ、サンガに磨かれる**中で優しくされるのでしょう。

最後に**「最高の生き方」とは「優しくなれたこと」**だとおっしゃった方の話から、**明るく、優しく、温かな心を大切にして、困っている人の手をとり、法をよりどころとしてともに心を磨き合う中に、優しさがあるようだ**とまとめておられます。

私は「優しい」反面「優柔不断」だと家族から指摘されます。自らを磨くことを怠っていると改めて反省することができました。ありがとうございました。

大輪の華を咲かせます　名称新たに「京都蓮華の会」

教会に蓮の華を咲かせようと、４年前に「法輪クラブ」が栽培することになりました。当時、蓮栽培の知識が皆無に等しく、仲間と知恵を出し合い、府立植物園の園芸相談室に学びにいったりしたそうです。

平成２２年４月、未経験の不安の中、苗を植え付けました。苗に根が張り、新芽が出てはきましたが、用土と肥料、水質などのトラブルが続出し、１年目の開花は難しいかと思ったようです。

そんなとき、水性植物の栽培に詳しいメンバーが加わり、様々なトラブルに対処していくことができました。こうした取り組みが功を奏し、見事な蓮の華が咲きました。

教会の正面階段に置かれた植木鉢に開花した蓮の華は、教会に参拝する人を温かく迎え、三条通りを往来する人々の気持ちを和ませています。

蓮は朝日を受けて開花し、午後３時には花弁を閉じます。これを毎日繰り返し、４日目には花弁が茎から落ちます。そして、秋の終わり頃になると、地下茎のれんこんができ、次の世代に生命をつないでいきます。

メンバーの一人は、蓮をそだてることで「自然世界の営みに大きな感動を覚えます」と述べています。そんな悦びを広げたいと、若いメンバーも加わり、名称も新たに「京都蓮華の会」としてスタートしました。

世界平和を祈願し　宗教者がたすきリレー　京都マラソンにて

京都マラソンに併設 日本初開催
InterFaith駅伝
～平和を願う祈りの駅伝～

２月16日、東日本大震災の復興支援を掲げた第３回京都マラソンが開かれ、約１万６千人が古都を駆け抜けました。また、国内外の宗教者による「インターフェイス駅伝」も初めて同時に行われ、仏教やキリスト教、イスラム教など５カ国40人の宗教者ランナーが４人ずつ10チームに分かれ、たすきをリレーして世界平和を祈願しました。

京都教会から古田雅章・渉外部平和活動推進委員長が第１走者を務めました。「東日本大震災の復興と世界平和を祈願しながら走り、その思いを込めて、海外からこられたキリスト教の方に手渡しました」と語っていました。

青年部員がたすきの中継所での誘導や通訳のボランティアにあたりました。そのほか佐藤教会長をはじめ多くの会員が沿道でランナーに激励の声援を送っていました。

宿直の役目を果たし、自らを高める精進を誓う　～宿直者学習会にて～

２月９日、宿直者学習会が行われ、宿直の奉仕に携わる約60名の壮年・青年が参加しました。

まず、３人のパネラーによるディスカッションで宿直の現状や取り組んでいること、改善点などを語り合いました。

続いて、佐藤教会長からの研修があり、宿直は「ご本尊に奉仕させて頂く重要なお役であること」、「仏になるためにさせて頂くこと」と述べました。

本会では、日中の道場当番、夜間の宿直を会員の奉仕によって実施しています。これらは会員の大切な修行のひとつとして、毎日繰り返されてきました。

研修の後、懇親会が行われ、今年も一年精進することを誓い合いました。

庭野日鑛会長の著書に学ぶ　「こころの眼（まなこ）を開く」より

■人は一生、学生

「学生」という字を上から読むと「学ぶことは生きること」となり、下から読むと「生きることを学ぶ」となります。ですから、大学時代だけが学生なのではなく、みんなが一生、学生である、と私は思っているのであります。

仏道を歩むのも「人生とは何ぞや」から始まり、「なぜ、思い通りにならないのか」「この苦しみをどうしたら解決できるだろうか」と真剣に尋ね求め、学ぶことです。私たちは仏さまの教えを学びつつ人生を歩んでいますが、これも一つの「学生」の姿でしょう。

（中略）

菩薩の誓願の一つに「訪問無尽誓願学」という願があります。仏さまの教えは無量・無数であっても、すべてを学びたいという誓願です。信仰者は一生、学生であるとつくづく思うのであります。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

人生は学びの連続だと言った方がおられます。しかし、漫然とした受身の「学び」ではなく、自らが「学びたい」と願って、求めて学ぶことの大切さを教えてもらう一節だと思います。

ＷＣＲＰに情熱を注ぐ人　WCRP 国際委員会副事務総長　杉野恭一氏　に聞く（2）

前回に引き続き、ＷＣＲＰ国際委員会副事務総長の杉野恭一氏の取り組みを紹介します。

《スリランカ諸宗教評議会》

2012 年 11 月、最も深刻な内戦の被害を受けたスリランカのキリノッチ県で、同県のヒンズー教・キリスト教・仏教らの指導者により、**「WCRP スリランカ諸宗教評議会」**が発足しました。発足に先立ち、WCRP の一行はジャフナ地方評議会を訪問し、青年育成、医療キャンプ、シンハラ・タミル言語教育プログラム、女性の社会参画・生活支援等の諸宗教活動の視察を行いました。

国連の報告によると、政府軍との内戦により戦争終結直前には同地域で約 20,000 人の犠牲者が出ました。30 年に及ぶこの民族紛争での総死者数は 70,000 人に上りました。WCRP 地方評議会は、戦争被害からの復興、国内避難民への対応、同地域の和解と社会の再建に関する課題について提言を行う組織体として、重要な役割を果たすことになります。

WCRP 国際評議員の酒井教雄師は挨拶の中で、スリランカ評議会の発足への祝意を表するとともに、**日本が戦後の復興を果たすことができたのは、スリランカ人による支援のお陰であると謝意を伝え、**1951 年のサンフランシスコ平和条約締結会議の席上、ジャヤワルダナ元スリランカ大統領が、日本の戦後における国際社会への参画を支持し、法句経の言葉を引用して**「恨みは恨みによって消ゆることはない。慈愛によってのみ消ゆるものなり」と述べ、日本の賠償責任追究を放棄したことを紹介されました。**

今回、**立花産業さんが創立 50 週年を迎えられ、その記念事業としてスリランカに幼稚園を建設して下さる事も決定しています。**また、スリランカ諸宗教評議会のメンバーが来日した際は、外務大臣を訪問して話し合いの場も持ちました。

《南部タイにおける諸宗教協力》

ここは仏教徒とイスラム教徒の対立が激しい所ですが、ある時、タイ南部のイスラム教のモスクに、カンボジア仏教のテップボーン法王さまが入りました。その法王さまに**イスラム教の指導者が、手を差し伸べるという場面がありました。**これは我々からすると、それほど感動することでもないと思いますが、現地の人からすると信じられないことです。**イスラム教のモスクに仏教徒が入るだけでも考えられないことなのに、その指導者が手を差し伸べたことは、宗教協力をする上で非常に重要なメッセージでもあります。**

モスクに入るカンボジア仏教法王とモスク理事長

また２０１２年９月、ASEAN（東南アジア諸国連合：加盟国１０カ国）から宗教指導者、諸宗教評議会代表者、平和関連の学者、活動家など２００名以上が、タイのバンコクと紛争の続く南部パタニに結集し、ASEAN 諸国における紛争解決と平和構築に対する宗教者の役割、諸宗教協力の強化について国際会議を開催しました。そうした中で、**昨年は日本政府からタイの諸宗教評議会に ODA(政府開発援助)が拠出されました。**

（続く）

渉外部からのお知らせ

●3 月～4 月初旬の主要行事予定

３月　５日	創立記念式典	9：00～
	夜間創立記念式典	19：00～
８～９日	車いす駅伝ボランティア	9：00～
１０日	脇祖さまご命日	9：00～
１５日	釈迦牟尼仏ご命日	9：00～
３月　１日	朔日参り	9：00～
４日	開祖さまご命日	9：00～

●メッセージ

京都マラソンで沿道からランナーを応援しました。横にいた人は、ゼッケンやユニフォームを見て、名前を呼んで声援していました。呼ばれたランナーは笑顔で手を振って応えていました。疲れて走れなくなった人も声をかけられて、エンジンをかけ直して走り出しました。同じようにあいさつする時も、相手の名前を呼ぶのがいいと教えて頂いたことを思い出しました。